常葉大学短期大学部紀要 49 号
61-73　2018.

保育者養成校における表現系授業に関する考察

―表現を楽しむ遊び（造形遊び）の経験による「かく・つくる」イメージの変化―

A study on “Expression” in childcare training

－ A change of image “drawing and creation” based on experience in child art －

木　下　　藍
KINOSHITA Ai

キーワード：造形遊び、領域表現、保育者養成
Keywords: child art（Zoukeiasobi），expression, childcare training

かくこと・つくることそのものを楽しむ遊び（造形遊び）は、幼稚園・保育所・こども園や小学校の図画工作科で多く行われている造形表現である。本研究では保育者を目指す学生が、造形遊びを経験することで何を学んでいると考えているかを記述式アンケートにより調査した。その結果、1. 人とのかかわり、2. 素材とのかかわり、3. 自分の変化、4. かく・つくる活動へのイメージの変化、5. 保育者としての視点、という 5 つの傾向に分けることができた。アンケートの記述内容から、周りの人や素材と対話することで、これまでの「かく・つくる」イメージに変化が起こり、表現することへの意欲や自信につながっていくことが推察された。さらに、遊びの主体として造形遊びを行いながらも、保育者としての視点が芽生えつつあるということがアンケートから読み取れた。今後、子どもの表現に実際にかかわる実習や、保育者になった際にどのようにつなげていくかが課題である。

１．問題と目的

素材とかかわり、かくこと・つくることそのものを楽しむ遊び（以下、造形遊び）は、幼稚園・保育所・こども園や小学校の図画工作科で多く行われている造形表現である。「造形遊び」という言葉は小学校の図画工作科で用いられる用語であるが、もともと幼稚園・保育園からの連携と活動の関連を考えて作られたものであった。昭和 52 年の学習指導要領改訂により、小学校図画工作科に「造形的な遊び」が導入された。当時の図工教育を取り巻く環境について、西野（2012）は、「大人の文化を反映した絵画、彫刻、デザイン、工作という領域で構成されており、その中でも圧倒的に絵を描くことに重点が置かれていた」と述べている。そこでは必ずしも子ども主体の表現がなされていたわけではなかった。そこで子どもに表現をゆだねる新しい分野として位置づけられたのが造形遊びであった。造形遊びに関する実践研究は特に小学校低学年において盛んに行われている。幼小連携の観点から行われている造形遊びに関する研究には松下（2015）や丁子（2012）のものがあり、幼児期における造形遊びの重要性やその実態が述べられている。

幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育･保育要領においては「造

形遊び」という用語は出てこないが、領域表現の内容には次のように示されており、かくこと・つくることそのものを楽しむ造形遊びのねらいに共通するものである。「(1) 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。(4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。(5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。(7) かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。」(下線筆者)

しかしながら、筆者が保育者養成校で表現系の演習を行う中で、学生が描くこと・つくることそのものを楽しむよりも、技術的な評価を気にしているのではないかと感じることがあった。筆者のアンケート調査 (2014) では、35%の学生は絵を描くことが嫌いだと答えており、描くことに苦手意識を持っている学生は 64%いるという結果になった。「作品を上手に完成させること」だけを目的にしてしまい、「自分が思ったように作れない」「上手にできない」ことから図画工作・美術の時間そのものが嫌いになってしまい、自分はかく・つくることが苦手である、と思っている学生も少なくはない。

その要因の一つとして、小学校高学年から中学校、高校と進むにつれて、図画工作・美術の授業が「作ること自体を楽しむ造形活動」から「完成した作品を評価する造形活動」になっているのではないかと筆者は考える。文部科学省による義務教育に関する意識調査 (2005) では、小学 4 年生では 79.0%の児童が図画工作を「好き」「まあ好き」であるのに対し、中学 3 年生ではその値は 51.6%に減少している。また、富山 (2013) の研究では、教育学部の学生が図画工作•美術に対して「『図工』は楽しく、『美術』は発想が浮かばなくなった」「才能が評価されているようで嫌」「紙の画面の白を埋めるのがプレッシャー」といったマイナスの思い出を持っており、それが苦手意識に繋がっていることが伺える。

また保育の現場においては、表現活動を行う際、幼児自らの主体的な取り組みや自由な発想を受け止めつつ「楽しむ」ことに重点を置いているが、幼稚園・保育所において造形表現は「絵画展」等のように単独で実施されていることが多いことや、保育者自身が表現活動に苦手意識を感じている場合があることが、智原ら (2015) の調査により指摘されている。このように、保育者・教育者を目指す学生や現場で働く保育者は、必ずしもかく・つくる表現活動に対して肯定的な思いだけを持っているわけではない。

保育者養成校における造形遊びについての先行研究には、花田・樋口 (2017) の研究がある。図画工作の授業前後で造形分野に対してどのように意識が変化したかアンケートにより調査したものであり、それぞれの造形遊びの面白さの数値化や、図画工作・美術に対する見方の変化をアンケートにより明らかにしている。そこで筆者は、様々な素材とかかわり「かく・つくる」こと自体を楽しむ経験を増やし、造形に対するマイナスイメージを減らすことを目的として「図画工作Ⅰ」の授業において造形遊びを取り入れた演習を行った。そして 5 回の造形遊びの経験の後かく・つくることへのイメージがどう変化したかアンケートを行った。

本稿では自由記述によるアンケートを実施し、学生の「かく・つくる」ことに対する意識がどのように変化したのか、主観的記述を基により具体的に調査することを試みた。遊びの主体となって造形遊びを経験することが、保育者を目指す学生にとってどのような意味をもつのか考察することが本研究の目的である。

2. 研究方法

2017年図画工作Ⅰの授業内で、5回の造形遊びの演習と、1回のふりかえりの計6回の演習を行った後、アンケート調査を行った。

研究対象：T大学短期大学部保育科・英語英文科（幼稚園教諭免許状取得希望者）
　　1年生　197名

調査内容：「今までの『かく・つくる』のイメージから、6回の活動を経て変化したことはありますか？（あれば、どのような）」という質問に自由記述で回答する小レポート形式のアンケートを行った。

分析方法：回答が記入された調査用紙をコピーし、意味のまとまりごとに切り取りカードにした後、KJ法を用いて分類した。分類した結果をもとに、造形遊びの体験による学生の学びについて考察し、そのイメージモデルを提示した。

3. 倫理的配慮

本研究は「保育者養成における授業内容に関する研究～学生はどのように『体験から学んで』いるのか～」の一環で行ったものであり、常葉大学短期大学部研究倫理委員会の承認を得ている（29-008）。学生には事前に承諾を得ている。アンケート内容を論文に記載するにあたっては個人の特定がされないよう配慮した。

4. 題材設定について

様々な素材を取り入れた造形遊びを5回にわたって行い、6回目の授業で造形遊びのまとめを行った。6回の演習の活動内容について、手順、用具・素材、実際の姿、ふりかえりの順に示す。

①絵具遊び―全身で感じる―

領域表現のねらいに「(1) 色々なものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。」とあるように、幼児期の表現において「感じる」ことは重要な位置にある。そこで第1回目の演習では「特定のものを描く」ことを目的とせず、絵の具の感触を「体全体で感じる」ことをねらいとて絵具遊びを行った。

手順　教室全体にブルーシートを敷き、その上に模造紙（白または黒）を20枚程度つなげた大きな紙を作成して置く。学生は好きな色の絵の具を一色選び、水加減を自分で考え、模造紙の上に自由に表現する。

用具・素材　不透明水彩絵の具（12色）・模造紙（白・黒）・ガムテープ・ブルーシート・紙コップ

実際の姿　学生は絵具がついてもいい服装で遊びを行った。初めは恐る恐る絵具を手に付け、模造紙の上に描いていた。時間がたつにつれ、絵具をコップごと模造紙の上に垂らしたり、お互いの手に付け合ったり、足で描いたりなど様々な姿が見られた。

ふりかえり　五感で感じたことをふりかえりシートに書き表す。

②自然の中での造形

領域環境の内容において、「(4) 自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。」や、表現3内容の取扱い「(1) 豊かな感性は、自然などの身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と

共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること。」と記されているように、子どもの表現と自然環境には深い関係がある。2 回目の造形遊びでは自然の中で感じたことを自由に表すことをねらいとして演習を行った。

手順　必要な道具を学生自身が考え、中庭へ出る。石や土、植物といった自然の素材に触れながら表したいことを考え、表現する。

用具・素材　はさみ・やまとのり・クレヨン・ビニール袋・画用紙・ペットボトル・プラスチック容器・自然素材（事前に中庭の花をとっていいか承諾を得た）

実際の姿　クレヨンで花の写生をする、花で色水を作って遊ぶ、葉を画用紙に張り付けてコラージュする、花と画用紙でブローチを作る等の様々な姿が見られた。

ふりかえり　自然の中でどのような遊びを行ったか書き表す。

また「とっておきの１枚」の写真を一人１枚送り、それを印刷したものを学内に展示した。（figure1）見える形で展示することにより、形に残らないその時だけの表現であったとしても他の学生がどのような表現を行ったか知ることができる。

図１　学生によるとっておきの一枚の展示の様子

figure1　picture by students

③土粘土を使った表現（グループでの制作）

幼児の造形にとって触角は時に視覚以上に強いかかわりを持つ感覚である。3 回目の造形遊びでは、感触を味わうことを目的に土粘土を用意した。また、グループでの制作とし、複数人で共通のイメージをもちながら作ることも目的とした。

手順　土粘土の感触を楽しみながら、4 ～ 6 人のグループで一つのテーマを考え作る。

用具・素材　土粘土・粘土板・へら・割りばし・ストロー・タコ糸

実際の姿　動物の世界、架空の町等、グループでイメージを共有しながらそれぞれ作るグループ、お城、ケーキ等、一つの大きなものを全員で作るグループ、それぞれ好きなものを作りながら、「宇宙」等大きなイメージを当てはめるグループ等がいた。

ふりかえり　環境図と共に起こったこと、会話、作ったものなどを記す。

④絵具遊び―様々な技法を試す―

4回目の造形遊びでは、1回目に用いた絵具を再度取り上げ、様々な技法（モダンテクニック）を試す時間を設けた。絵画技法というと、「正しく技法を使わなければならない」「技法のやり方を覚えなければならない」と捉えられやすい。しかし、絵画技法は子どもの表現を豊かにするための手段であり、それを覚えて正しく使うことが目的なのではない。演習では、試しながら遊ぶことを目的とした。

手順　実際に様々な技法について、筆者が見せながら簡単に説明する。その後、実際に様々な技法を試してみる。

用具・素材　透明水彩絵の具・不透明水彩絵の具・クレヨン・色画用紙・半紙・上質紙・筆・歯ブラシ・ストロー・竹串

実際の姿　初め様々な絵具の使い方について筆者が実際に試しながら紹介すると、「おお」という驚きの声が上がった。学生自身が試す段階では、何枚も紙を使用して様々な技法を試す姿が見られた。中には、複数の技法を組み合わせた画面作りをしたり、オリジナルの技法を生み出したりする学生もいた。

ふりかえり　試した技法について、実感をもとに特徴や魅力、感じたことをまとめる。

⑤飾って楽しむ―様々な素材を試す―

領域表現の内容「(7) かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。」とあるように、作った後、それを使って遊んだり、飾ったりする楽しみもある。5回目の造形遊びでは、様々な素材や道具を試し、素材に触れながら自分の表現したいものを作っていくこと、作ったものを飾って楽しむことをねらいとした。

手順　最初に用具の使い方を説明し、素材を見ながら自分の作りたいものを決めていく。できたものを教室内の好きな場所に飾る。

用具・素材　はさみ・カッター・ヒートカッター・のり・ボンド・テープ・グルーガン・自然物（木の実・シーグラス・貝殻など）廃材（プラスチック容器・牛乳パック・発泡スチロール・トレー）・ひも類（スズランテープ・タコ糸・毛糸など）

実際の姿　様々な自然物、人工物の素材を用意した（figure2）ことで、初めは何を作ろうか具体的なイメージがなかった学生も、素材の形や質感、特徴などからインスピレーションを得て作る姿が見られた。また、これまでの造形遊びの経験を活かして、紙コップにバチックをし、オリジナルの素材を作る学生もいた。また、飾る段階では、紐で吊るす・窓辺に飾る等の姿が見られた。

ふりかえり　環境図と共に起こったこと、会話、作ったものなどを記す。

図 2　様々な素材を用意した環境
figure2 various materials

⑥造形遊びのふりかえり

5 回の造形遊びを行った後、グループでのふりかえりを行った。

手順　これまでの 5 回のふりかえりシートから任意の 1 枚を選択する。そこに書かれているいる内容を、保育内容領域「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」のどれに最もあてはまるか考え、5 色に色分けする。色分けしたものを見ながらグループで気づきを話し合う。最後に、「今までの『かく・つくる』のイメージから、6 回の活動を経て変化したことはありますか？（あれば、どのような）」という質問に自由記述で回答する小レポート形式のアンケートを行った。

5. 結果と考察

どの学生もかく・つくる活動に対するイメージの変化があったようで、様々な回答が寄せられた。傾向ごとに分類すると、1. 人とのかかわり、2. 素材とのかかわり、3. 自分の変化、4. かく・つくる活動へのイメージの変化、5. 保育者としての視点、の 5 つに分けられた。人とのかかわりに関する回答が最も多く、次いでかく・つくる活動へのイメージの変化、保育者としての視点、自分の変化、素材とのかかわりという結果になった（table1）。さらに、それぞれの大分類から回答の傾向ごとに分類した（table 2）。それぞれの分類について、記述内容とともに考察していく。記述内容については誤字と思われるものもあったが原文のまま記載した。

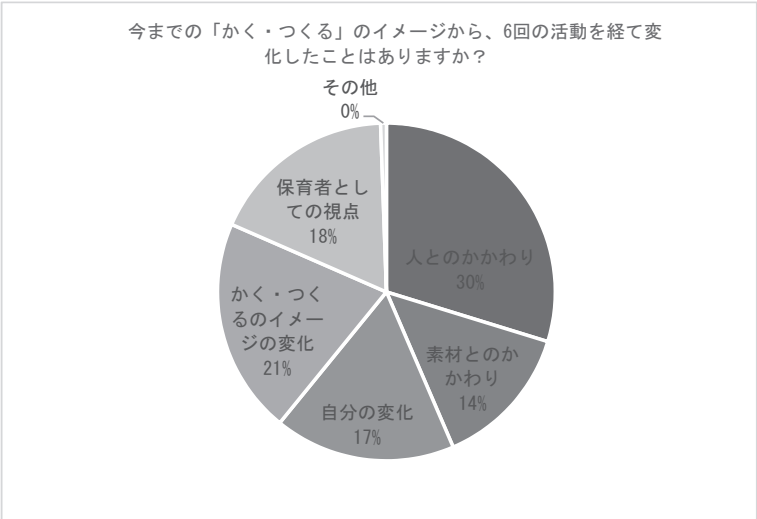

表１　大分類　「かく・つくる」イメージの変化

table1　large classification change of image:drawing and creation

人とのかかわり	活動を通したコミュニケーション	54
	他者の表現からの刺激	37
	複数人でつくることの満足感	4
	他者の作品から感じ取る	13
素材とのかかわり	素材から興味・関心がわく	38
	手を動かして試す	12
自分の変化	身体性	4
	苦手意識の減少・積極性の向上	36
	表現力の向上	23
かく・つくるのイメージの変化	楽しい・自由	21
	表現の多様性	25
	過程の重要性	29
保育者としての視点	環境構成・素材への意識	20
	五領域への言及（多様な視点）	25
	子どもの姿を想像する	20
	その他	2

表２　小分類　「かく・つくる」イメージの変化

table2 small classification change of image:drawing and creation

①人とのかかわり

1）活動を通したコミュニケーション

造形遊びを通して人とコミュニケーションをとることができて楽しかった、という内容の回答は最も多く 54 件あった。「描いたり作ったりすることは個人での作業だと思っていたけど、一人一人違うものを作っていても自然と人とのかかわりが生まれるのだと思いました。」「一人でつくるのではなく、みんなで協力して作ったり、提案しあうことで心が軽くなるような安心感があった。」「今までは、一人で作品を作ることが多かったので、グループで作成する楽しさを学んだ」などの記述があり、これまでの「美術＝個人制作」というイメージから、活動を通して人とかかわることの楽しさや安心感を感じていることがわかる。

2）他者の表現からの刺激

他者の表現から刺激を受けたという内容の記述も多く、37 件あった。「友達が作っているものを見て、こんなのも作れるんだとたくさんの刺激をもらうことができました。」「人とかかわって何かをすることによって、自分の知識が深まりました。今まで想像できなかったアイデアを人がしていたりすることで、とても面白い経験をすることができた。」等があり、他者の表現している姿を見ることが自身の表現の刺激になったり、新しいアイデアが生まれたりする経験をしている様子がうかがえる。

3）複数人でつくることの満足感

複数人でつくることの満足感については 4 件あった。「作り終わった後の達成感は一人で作品を作るよりもみんなで作った方が、倍に味わうことができると学んだ。」等の回答があり、共同制作の楽しさが満足感につながると考えられる。

4）他者の作品から感じ取る

「人それぞれに思い描いているイメージが違うので、製作に正解はないのだとわかった。」「いいと思うものは人それぞれであって、これをかきたい！つくりたい！と思うものも一人ひとり違うことをとても感じた。」等の、他者の作品を見ることで一人一人の個性に気づいたという回答があった。授業内で特別に鑑賞の時間を設けることはなかったが、教室内に作品が飾ってあることで自然に鑑賞することができ、自分が作っているときには気が付かなかった他者の良さに気づくことにつながったと考えられる。

②素材とのかかわり

1）素材から興味・関心がわく

「普段使わない道具や初めて見る道具でも興味を持ち『使ってみたい！』と思うことがあったので、まずはどういう道具・素材なのかを知って興味を持つことが大切だなと感じました。」「たくさんの道具を使って作ることが難しいと感じていたけど、たくさんの道具があるからこそつくれる新しいアイデアもあるんだと気付けて作るのが楽しくなった。」等の、様々な素材に興味を持って触れることで自分の表現が広がるという回答が見られた。一方で「クレヨンや絵具はこの使い方だと思い込んでいましたが、6 回の活動を通して、いろいろな素材を組み合わせるなど使い方はたくさんあると分かりました。」「今までは、花は咲いているもの、紙は何かを書いて使うもの、絵の具はぬるものというように、素材に対して、1 つの使い方しか意識していなかったけど、6 回の活動を通して、この素材はどのような使い方があるのだろうと考えながら作品作りをするようになりました。」等の回答もあり、ひとつの素材に対して様々なアプローチの仕方があることに気づく姿も見られた。

2）手を動かして試す

素材を介した自身の変化として、手を動かして素材を試すようになったという回答も12件あった。「作っていくうちにいろいろ試すようになりました。できるかな？と思ったら、とりあえず試すようにしました。作っていくうちに自分のイメージが変わったり、他の人の意見を取り入れたりしました。」「頭で考えてかく・つくることも大切だけれど、実際に肌で感じたり、素材に触れたり、体で感じることで新しい発見がある」等の回答があり、素材との対話を通して柔軟に表現を変化させていく経験をしていることが読み取れる。

③自分自身の変化

1）身体性

自分自身の変化として、内面だけでなく身体性に言及しているものが4件と少ないながらあった。「動くことで自然と得られるものがある。」「今まではただ作ってみんなと楽しかったね！で終わっていたけど、1回1回ふりかえりをしたり、全身で遊びを感じ取ろうとすることができてきました。」等の回答があった。

2）苦手意識の減少・積極性の向上

自身の変化の中では、苦手意識の減少・積極性の向上について述べている回答は36件と最も多かった。「創作に対して重いイメージが消えていって、気軽に自分の感情を表現できるもの、という感じになった。」「1つの作品を何人かの人に褒められたときは、昔の笑われたトラウマの傷が浅くなったような気がしました。」「上手に作れるわけではないけど、全力で自分が楽しみながら作業することができ、苦手なイメージがやわらぎました。」「最初は友達とあれしよう、これしようと周りを見ながら作業していたけれど、だんだん自分で考えて、自分から積極的に作るようになった。」「初めは大変っていうイメージがあったけど、作業を始めると楽しくてアイデアもたくさん出るし友達の見て変えたりして時間がたつのが早いなって思いました。毎回違うことをするたびにもっとやりたいって気持ちが強くなっていきました。」等、回数を重ねるごとに主体的に取り組むようになっている自分の姿に気づく記述が多く見られた。

3）表現力の向上

「自由に作ると、人それぞれに個性があるので、いろいろなアイデアがあったり、自分には思いつかないようなものを知ることができて、自分の作品に活かすことができて、自分の作品に対する作品や想像の幅が広がると思いました。」「楽しんでやることで納得できる作品を作ることができた」「すごく頭が柔らかくなったと思うし、回数を重ねるにつれて想像力の幅がとても広がったと思います。」等、造形遊びの経験を経て自身の表現力や想像力の幅が広がったと感じている回答が23件あった。特に興味深いのは、「表現力＝上手にかく・つくる」という捉えがなかったことである。これは造形遊びの、表現することそのものを楽しむ・子ども（ここでは学生）が表現の主体であるという特徴によって得られた効果であると言えよう。

④かく・つくる活動へのイメージの変化

1）楽しい・自由

かく・つくることに対して自由であった・楽しかったというポジティブな回答は21件あった。「今までは絵を描いたり何かを作ったりするのは自分がうまくできないから好きじゃなかったけれど、自分が思ってたのとは全然ちがくて、思ってたのより楽しくて、面白くて夢

中になってできるから図工ってやっぱり楽しいなと思うことができた。」「自由に好きなものを好きなように表現するというのは大きくなっても楽しいということが分かりました。」等、造形遊びの「自由さ（何かを作らなくてはならないということがない）」が、「楽しさ」に繋がっていると推察される。

2）表現の多様性

「かく・つくるには様々な種類があり、人それぞれが思うアイデアや想像力により行ったものになると感じました」「図画工作は机に座ったり、屋内で行うものだというイメージを勝手に持ってしまっていたけど、机を片付けて全身を使って表現したり、屋外の植物や環境からも素材を得ることができたりと、いろいろな活動の幅があるということがわかった。」等の回答があり、5 回の造形遊びの中で様々な環境・素材があったことが表現の多様性に気づく起因として考えられる。

3）過程の重要性

造形活動というと、完成した作品に重きが置かれがちであるが、かく・つくる過程の重要性に気づいたという回答は 29 件あった。「これはこうしなくてはならないという決まりはなくて、自分がつくりたいものを作って、それがもし失敗してしまったとしても、その失敗も意味があることで、これからは、笑いながら、友達にその作品を見せて、いろいろなことを分かち合っていけるのではないかと思います。」「中学・高校までの美術の授業では、かく・つくるの結果（どんな作品が仕上がったのか）をメインにしてやってきたけど、この図工の授業では、かく・つくるの結果だけでなく、そこまでの作業の過程や工程、環境や周りの人たちとのコミュニケーションなど、様々なことを通してのかく・つくるだと思いました。」等の回答があり、学生自身が造形遊びの過程で感じることがあったからこそ過程の重要性に気づけたのだと考える。

⑤保育者としての視点

1）環境構成・素材への意識

学生が造形遊びを行いながらも、その遊び環境や素材に気づいた回答は 20 件あった。環境構成については以下のような回答があった。「環境がしっかりと構成されているから、楽しんで一人一人が思い思いの作品を作れるのであって、環境構成がとても大事なんだと思った。」「これまでは先生が環境を作り授業をしてきたけれど、2 年後は私も保育者となり実際に子供たちに教えていく立場になるので、授業において環境づくりという所をきちんと見て少しでも将来に生かしていきたいとより強く思いました。」素材については、②素材とのかかわりとも関連するが、「日常生活にあふれているものを一つの材料としてみることができるようになった」等、図画工作Ⅰの授業内に留まらず、日常生活においても物を見る視点が変化したという回答が多く見られた。

2）5 領域への言及（多様な視点）

造形遊び全体のふりかえりの際に調査を行ったため、5 領域に関連した回答は 25 件あった。「今まではただかいてつくるだけで、5 領域のことは特に考えずに楽しんでいましたが、6 回の活動で、かく・つくるにはただ物を完成させることだけでなく、様々なことがかかわってくるのだなと思いました。」「ただかく・つくるだけではなくて、1 つ 1 つにちゃんとしたねらいがあることがわかった。」等、造形遊びの中に、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育•保育要領に記載されているねらい、内容が含まれていることを、

ふりかえりによって理解したという回答があった。しかし中には「5 領域が大切だと思った」というような、曖昧な回答も 3 件あった。1 年次前期の段階では保育内容領域の授業は 1 科目しか受講していないため、その伝え方については今後検討していかなければならない課題である。

3）子どもの姿を想像する

造形遊びを表現の主体として行いながら、保育者として子どもの姿を想像する回答は 20 件見られた。「回数を重ねていくたびに楽しいだけじゃなく自分が保育の現場に立った時、どのようなことを園児たちに感じてほしいかを考えて楽しさを伝えていきたいなと思いました。」「子どもたちにも、素材に触れる時間や身近なものから絵の具、粘土のようなもの、幅広いものを自由に友達と作る時間を大切にしてあげたいなと思った。」等の回答があった。学生自身が造形遊びによって「かく・つくる」ことを楽しむ経験を重ねることが、「子どもにも「かく・つくる」ことを楽しんでほしい。そのためにはどうすればいいか。」という発想につながったのだと推察する。また、造形遊びの演習だけでなくふりかえりを重ねてきた効果もあると考える。

6. まとめと今後の課題

造形遊びによってこれまでの「かく・つくる」のイメージに変化があったことがアンケート調査により明らかになった。アンケートの記述内容から、周りの人や素材と対話しながら、自分自身の中に変化が起こり、表現することへの意欲や自信につながっていくことが推察される。さらに、遊びの主体として造形遊びを行いながらも、保育者としての視点が芽生えつつあるということが読み取れた。その学びのイメージを次のモデルに示した（figure3）。実線部分は造形遊びの体験による学生の変化であり、点線の矢印以降は今後期待される学生の姿である。

図画工作Ⅰは 1 年次の授業であり、「かく・つくる」ことに対して肯定的なイメージを持つことは、実習等で子どもとかかわる際にもプラスに働くと考えられる。今後は、造形遊びによる学びを、実習や実際の保育現場で子どもの表現に関わる際の援助にどうつなげていくかが課題である。

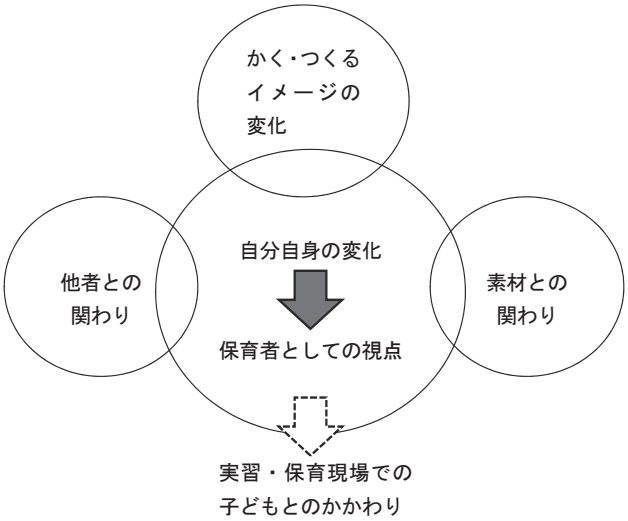

図 3　造形遊びの体験による学生の学びのイメージ
figure3　student's learning image by experience of child art

7. 文献

西野範夫（2012）「美育文化インタビュー」美育文化 5 月号　美育文化協会　vol162　No.3 7-14

松下明生（2015）幼児の造形活動と小学校図画工作科の内容分析―文部科学省検定教科書に見る幼児課題との同一性と教育内容の変遷―　名古屋柳城短期大学研究紀要第 37 号 75-86

丁子かおる（2012）保育現場における材料用具の経験についての調査研究―美術教育の幼少接続へ向けて―　美術科教育学会誌第 33 号　287-300

文部科学省（2018）幼稚園教育要領

厚生労働省（2018）保育所保育指針

内閣府・文部科学省・厚生労働省（2018）幼保連携型認定こども園教育・保育要領

木下藍（2014）保育養成系の学生による描画時の画像検索とその利用に関する考察　常葉大学短期大学部紀要第 45 号 209-215

義務教育に関する意識調査（2005）文部科学省
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217009_1424.html
（閲覧日 2018 年 10 月 5 日）

富山祥瑞（2013）教科としての「図画工作・美術」が抱える課題 ―教育学部・大学生の回想による調査報告―　愛知教育大学研究報告教育科学編 62　207-214

智原江美・鍋島恵美・和田幸子・下口美帆・田中慈子（2015）幼稚園・保育所における表現領域の活動に対応した保育者養成教育のあり方－京都府南部の幼稚園・保育所へのアンケート調査からの検討　京都光華女子大学研究紀要第 53 号　119-134

花田嘉雄・樋口健介（2017）図画工作の授業前後における短大生の造形分野に対する意識変

化調査　羽陽学園短期大学紀要　第10巻　第3号（通巻37号）387-394
西村隆司（2006）小学校図画工作科における造形遊びの位置　教育学部論集　第17号69-80
静屋智（1996）造形遊びに関する一考察　山口大学教育学部附属教育実践指導センター研究紀要第7号　75-88